

## 朝陽館漫筆

### 卷之廿六

鎌原桐山著。『北信郷土叢書卷七』より。文化八（一八  
一一）年の項。

ここに「深川八幡境内におゐて開帳あり」というの  
は、一茶の『七番日記』の文化八年四月廿日に「桂国  
ト戸隠開帳参」とある深川（富岡）八幡における出開  
帳であらう。

戸隠権現今春東都深川八幡境内におゐて開帳あり六十日の  
間なり東都迄往來の行粧美々敷事とぞ東都にて開帳取持の  
町人数人ありて本坊深川へ着の砌伺とて行し時取次の者挨  
拶そまつにて先づそれに扣へ居らるべしやがて御本坊御目  
見仰付らるべしと申ければ町人共立腹し我々は権現様御開  
帳の事こそ御世話もいたすなれ御本坊の御目見は望む所に  
てなしとつぶやきける此時ケ様のあいしらひなく本坊の膝  
元へ呼出し親しく取持頼みあらばいか程もとり持て参詣寄  
進等も賑やかなるべきに惜き事と聞人云あへり取持の町人  
共右の趣ゆへ取持もはかくしからず寄進物も少くその上  
開帳中参詣も多からず雨天勝ゆへ六十日の内四十日ほどな  
らでは開帳もなかりしと也。賽銭も開帳の費用と差引丁度  
位ならんと也東都にての開帳□十年目なり□十年以前の開  
帳には賽銭少く費用の方百金程も引足ざりしと也帰山の後  
七月十五日より八月十五日迄三十日の間開帳あり

予（鎌原桐山）八月十四日藤田右仲竹村七左衛門と戸隠に参詣す

三社権現一同に中院にて開帳あり宝物数多あり宸筆の懸物六七幅其外神代神楽の鈴惟持將軍の太刀犀角の笏神君の鞍同厚總の押懸等其余懸物多し一日の賽錢拾貫方五十貫に至る開帳畢りて善光寺へ馬にて出し金と替東都にての寄附三坐の芝居より紫ちりめんの幕其外町家より神楽の獅子猩々緋ののぼり等数々あり右仲心安き由にて本坊の家老中野伊織が家に投宿す上野村より奉納の歌舞妓あり。

註 「一誠齋紀実」(北信郷土叢書・卷7)/真田貫道著  
「他」(北信郷土叢書刊行会, 1935) (DOI  
10.11501/1194331) の 72、73 コマ目。永続的識  
別子 [info.ndljp/pid/1194331](http://info.ndljp/pid/1194331)。